



指揮者と楽員その刺激の関係 マケラⅡ。パリ管、ヴァイグレⅡ読響



サン＝サーンスの《オルガン付き》を演奏するマケラ指揮パリ管
©N.Ikegami / MUZA Kawasaki Symphony Hall

マケラは何がすごいのか——。「こちらに振り向いて目が合います。はい。分かりました。なんでもやりますという気になります」。2022年にマラーの交響曲第6番で共演した東京都交響楽団のソロ・コンサートマスター（当時）、四方恭子はこう語っていた。ケルン放送交響楽団のコンサートマスターも務めた音楽家をもうならせる何か。コンセルトヘボウ管弦楽団のヴァイオリン奏者も同じことを語っていた。楽員を巻き込むエネルギー。それを支えるスコアの読みの深さと音楽性。それらを瞬時に伝える指揮の言語の豊かさは、やはり、マケラを特別な指揮者たらしめている。

サン＝サーンス《オルガン付き》クレッシェンドと猛烈な刻み

パリ管弦楽団のミューザ川崎シンフォニーホールでの来日公演（6月18日）では、サン＝サーンスの交響曲第3番《オルガン付き》が前半で演奏された。宇宙を思わせる神秘的な序奏に続き、提示部に入る直前、指揮者とコンサートマスターは目を合わせ、ともに「パキッ」と音を立てたようにスイッチを入れ、音楽は猛然と前に進み始める。えぐるような表情。コンサートマスターはひんぱんに後ろを振り返り、力のこもったフォルテを求める。

緩徐楽章にあたる第1楽章第2部でのオルガンとの調和が生むたゆた。オルガンの表現は積極的で、存在感は大きい。第2楽章第1部のエッジの効いた弦。第2部を先取りする第2ヴァイオリンとヴィオラは、エスプレッシヴィオの限りを尽くして旋律を歌う。大きな呼吸で楽想は弧を描くように結ばれ、第2部（フィナーレ）に移る。深みのあるオルガンの響きは、作曲者にとってもオルガニストとして近い存在だったフランスの大聖堂を連想させる。呼応する弦とピアノのレガートは、降り注ぐ聖なる息吹とも、人間の側からの賛美とも感じられる。フォルテで前に進む表情は決然としつつ、だが、シンバルは抑



ドヴォルザークの交響曲第7番を演奏するヴァイグレ指揮読響
©読売日本交響楽団 撮影：藤本崇

え気味で、空間を次第に大きく押し広げていくような打楽器の活用意図が意識されている。内実にあふれたコーダへのクレッシェンドと、ヴァイオリン群の猛烈な刻み。クライマックスへの歩みは、周到な計算の下に構築されながら、あざとさを感じさせない。

パリ管は、個がそれぞれ独立して輝き、他と異なることこそが尊ばれるフランスの気質と文化を象徴する存在の一つとされる。「一丸となって」という形容は、おそらくもっとも似合わない楽団でありながら、個々の楽員が120%の力を引き出され、その総体と

して炎のような演奏が生まれる。同時に、この交響曲の「世界の終わりと救済の希望」という宗教的テーマが音の中から伝わってきた。マケラはやはり非凡だった。

チャイコフスキーの光 ドヴォルザークのやさしさ

だが日本の舞台は、パリ管に席巻されたわけではない。読売日本交響楽団の6月の名曲シリーズ演奏会（6月24日、サントリーホール）は、常任指揮者のセバステイアン・ヴァイグレ指揮。チャイコフスキーのヴァイオリン協奏曲とドヴォルザークの交響曲第7番は、楽員と指揮者の相互信頼から生まれる表現が深まった。「ここですよ」とヴァイグレが感に堪えたような表情で第1ヴァイオリンに視線を向ければ、瞬時にニュアンスが豊かになるといった具合である。

チャイコフスキーの協奏曲では第2楽章。憂愁に覆われた世界に陽光が射す。そんな変化をアウグスティン・ハーデリヒの独奏はもとより、フルートやクラリネットが音で表す。ドヴォルザークも第2楽章。やさしさにあふれた楽想がチェロやホルン、オーボエ、クラリネットのドルチェによって如実に伝わる。日本のオーケストラの日常は今、こんなにも豊かだということとを忘れてはいけない。



ラヴェルのピアノ協奏曲ト長調を演奏後、拍手を受ける
アリス＝紗良・オット(右)とカネラキス ©RikimaruHotta

ラヴェルとマラー 絶妙な楽器間の受け渡し

カリリーナ・カネラキスを迎えた都響の2日目公演（7月5日、サントリーホール）。アリス＝紗良・オットがソロを担った前半のラヴェルのピアノ協奏曲ト長調から耳を奪われる。第1楽章でピアノニッシモのホルンに続き、ピアノ独奏、ハープ、チェロ、ピアノ独奏と受け渡されていくアンサンブルの美。第2楽章でも、詩情あふれるピアノの長いソロに続き、コーラングレ（イングリッシュホルン）が実に抒情的な旋律を歌う。ここでもホルン、第2ヴァイオリン、チェロといった楽器間の受け渡しが絶妙で、名匠、ジャン・フルネ以来の都響のフランス音楽の伝統を思い起こす。首席ホルンの西條貴人は「都響のホルンは、弱音表現に力を



マラーの交響曲第1番を演奏するカネラキス指揮都響 ©RikimaruHotta

入れている」と語っていた。オットの演奏の味わいは豊かで、指揮者も楽団も十二分にニュアンスを汲み、ともに音楽を奏でていく。協奏曲を聴く究極の喜びがそこにはあった。

米国出身のカネラキスは、ベルリン・フィルのアカデミーにヴァイオリン奏者として在籍していた経歴を持つ。指揮に転じたのはサイモン・ラトルの勧めがあつてという。オーケストラの中で弾いていた経験の表れか、2日目の印象では楽員の自発的な表現との歯車がかみ合い、歌うところは存分に歌う。同時にしっかりと造形も感じさせる。

後半のマラーの交響曲第1番も、

ラヴェル同様、そこかしこの細部からオーケストラを聴く喜びがもたらされた。第2楽章の第1部からトリオへの移行部のホルン・ソロの弱音と、続く弦やオーボエの味わい。テンポは呼吸感も豊かに、自然な揺らぎをみせ、さわやかで清潔。楽章の結びのアツチエランドも自然で、終わりのシンバルで上品に結ばれる。

第3楽章のコントラバス・ソロに続くファゴット・ソロを聴くと、都響がきつてのマラー・オーケストラであることを思い起こす。主題はただ受け渡されてコピーされるのではなく、同じピアノニッシモの弱音表現ながら一層の魅力をもつて発展し、さらに弦の豊かな歌に結び付く。ハープやファゴット、コンマス・ソロが重なるあたりは夢幻の趣となる。

終楽章へ移ると、ドルチェ・カンタレーレとでも呼びたい旋律美の表現が一層心を打つ。弦楽器群は、うねるように歌うが、こども透き通った美しさに貫かれている。前号のマラー特集は「マラー 夏の交響曲」と題したが、マラーの目には夏の作曲小屋の前に広がる美しい湖が映り、湖面をわたるさわやかな風を感じていたのではないかと思う。この演奏ではコーダでの金管奏者の立奏は視覚的にも自然で、聴き終わってもさわやかさが残るのだった。